

「悪い噂」 玄月著

生々しく描く「在日」の苦しみ

ペールに包まれていた指導者が、長い歳月を経て分断された隣国からの訪問者（大統領）を微笑で出迎えたり、ある文学賞を厳正に審査した男が、公然と今度は死語となっていた母国の蔑視用語まで持ち出し民衆へ言い放つ風景を「在日」の人ら、中でも作家たちはどのような目で見、受けとめていくのだろうか。作者は昨年、「在日」の一世と二世の感覚の隔たりを炙りだす作品で芥川賞を受賞した。民族の底に流れる癒しがたい傷、そして「同化」していく中で誇りや怒りが否応なく奪い取られ無感覚となっていく姿がそこには表現されていた。これはそれに続く二本目の著書で表題作と『宵闇』の二作品からなっている。

『悪い噂』には「ホネエ＝骨」と呼ばれる男が出てくる。△骨△はそのあまりの幼児期の敵しい生活ゆえ、同じ「在日」の仲間たちからも疎んじられてきた。常によからぬ噂がつきまとい、それを傷とともに背負い生きていくのだ。不衛生により歯が入り腫れ上がった性器の亀頭を切断された姿は象徴的だ。作品はその甥である涼一という少年の目を通して、生々しいまでの実相をつつしだす。そこには吹き曝しの性と暴力があり、祖国の喪失と自らの人生を自分で選び取るこのできなかつた者のもつ苦しみがある。だからこそ読者は改めて次の問いと向き合わされる。△骨△とは一体何なのか。おそろく、この言葉にこそ意味が隠されている。異国の生活の舞台で「ホネエ」に軽っぽいアクセントをつけ呼ばれ、作者があくまで△骨△という名にこだわったその音の隙間の奥底に、答えは存在している。

『宵闇』は「祭り」という非日常の空間を背景に、一人の女性の封印された過去の性体験が甦^{よみがえ}ってくる。もう一方の女性は実は彼女の若年のころの分身の役目も担っており、両者の深層意識をかり、外からの抑圧と内からの抵抗を巧妙に描いている。話体の滑らかな表現が作品の崩れを救い、それがまた不気味な色彩と臭気をかもしだしている作品である。評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）



文芸春秋・1143円